

まちの活性化に図書館は最高の館！ 伊丹市立図書館ことば蔵の試み

伊丹市教育委員会都市活力部
(図書館長兼務) 綾野 昌幸



1 「ことば蔵」って？

「ことば蔵」は2012年7月に開設した伊丹市立図書館の愛称である。開設コンセプトは「公園のような図書館」。今までの貸本業務中心ではなく、にぎわいがあり活性化につながる新しいタイプの図書館を目指すこととなった。それは「今日的な図書館機能」の他に「交流機能」「情報発信機能」を加味していくというものである。

2 地域とことば蔵のちょっとした関係

新たに事業を行っていく上で、まず取り組んだのは「運営会議」の設置。名称は堅いが、基本的にオープンで誰でも参加でき、市民をはじめ民間の方々や図書館職員が、ことば蔵をどうやって活性化していくか議論する場である。1階の大部分が交流フロアと呼ばれ、「公園のような」雰囲気、飲食自由、会話自由としている空間である。イベント開催時はマイクやスクリーンを使ったりして様相が一変する。運営会議も、この場所で行っている。



運営会議

ことば蔵は「まちの人が主役」の館で地域活性化の一翼も担っている。その事業として代表的なのが「まちゼミ」である。これは、企業や商店の方などに「参加者のためになること」をゼミとして話してもらい、その会社やお店はファンを増やそうという事業である。清酒発祥の地伊丹の酒造会社の方が講師と

なり「おいしいお酒の飲み方」を教えたりもラッパ、雑貨店店主に「上手なラッピングの仕方」を実際に指導してもらうなどのタイアップで講師と参加者がwin-winとなっている。



まちゼミ ラッピング講座

3 運営面の工夫 Library of the Year大賞

運営面で一番の特徴は「無料×無料×無料」のシステムである。イベントをする際の講師料、参加する方の参加料、そして交流フロアの使用料がそれぞれ無料というシステムである。つまり、まちゼミや市民企画など全て基本的に無料で教えてもらっている。なので、年間20万円(ほとんどPRチラシやポスターなどの印刷費)で200以上(図書館企画含む)

のイベントを実施できている。低予算で運営し、にぎわいや交流をもたらす図書館ということで、「Library of the Year 大賞」をいただき、現在も視察が絶えないのはそういった、どこの図書館でも真似しやすい点だと思う。

4 ことば蔵により地域に生まれた変化



ことば蔵は年間約40万人の来館者があり、地域に人の往来をもたらし、中心市街地には、もともと多くの文化施設があった。そこに図書館が移転してきて、美術館での絵本原画展などとタイアップして図書館でも特別コーナーを設けたり、開催期間中にスタンプラリーを実施して回遊を図ったりという連携が生まれてきた。

ことば蔵では、さまざまな公募イベントも行っている。「日本一短い自分史」「しおりんピック」（手作りしおりのオリジナルピック）等々：中でも、まちと連携しているのが「帯ワングランプリ」である。これは、愛読書のオリジナルの「本

の帯」を作ってもらい、展示して来館者による投票で「ことば蔵賞」を決定。そして、市内の書店とも連携し書店が選ぶ「伊丹本屋大賞」も設定している。「この帯を巻いた本を自分の店で販売してもいい」と思った帯を選んで、実際にその帯をカラーコピーして本に巻き、販売していただく。これは、帯の作成者、友達、家族なども購入したりするので結構、売れることもあり、2018年は4店舗の書店が参加してくれた。

5 そして今後
図書館の可能性は∞

この章の副題を図書館の可能性は∞（無限大）とした。自分が図書館という施設に関わるようになって、まさにそれを実感している。なぜかというところ、今まで色んなソフト事業展開をしてきたが、図書館の強みは「本」というモノがある、そして「司書」という専門的なヒトがいる、ということだ。

イベントをしていても関連する本がたくさんある。また、



帯ワングランプリ受賞者(中学生)

それを深く追求できる頭脳として司書がいる。これは図書館ならではの圧倒的な強みだ。司書たちからの提案で「図書館を使った調べる学習コンクール」も2018年に初開催した。

また、民間企業との連携を強化していく。「まちゼミ」「帯ワングランプリ」をはじめ、様々な企業と連携してきた。TSUTAYAとは2017年から「TSUTAYA×ことば蔵」事業で「ムビワングランプリ」を実施。これは、TSUTAYAにあるDVDなどで観た映画のキャッチコピーを20文字以内で作ってもらおうという企画である。ことば蔵では応募作品の展示・投票だけでなく、TSUTAYAのソフトを使って映画を上映したりした。また、イオンとは「ふおと俳句」という事業を実施している。

そして、2018年から連携が本格化したのが、みなと銀行。銀行の方々が講師となり投資や詐欺防止の講演などを実施しているが、銀行のご厚意で「読書通帳」を寄贈していただいた。こういった民間企業の地域貢献との連携は、企業の予算で実施していただくので、win-winになるようしっかりとアイデア出しして事業構築をしていくだけで良い。

こういった図書館本来の機能、そして様々な連携を拡げていくと図書館という館は地域活性化に向けて無限の可能性を秘めていると感じる。